

## 論文

## 海難と抜荷

——摂津国御影治作船不正荷物取扱一件——

津川正幸

ここに取りあげる事例は嘉永5年下田湊で摘発された摂津国御影治作持船、  
沖船頭保蔵（安蔵）乗の樽廻船の水主達がひきおこした不正な一件である。

史料は「摂津国御影治作沖船頭保蔵乗、荷打ニ而下田湊江入津、不正荷物取扱候もの一件帳」として、横須賀史学研究会の編集による『浦賀奉行所史料第1集「臼井家文書」<sup>1)</sup>上巻』におさめられている。

## 海難救助の法令

近世日本海運史の研究史料として、海難（海損）に関する史料は比較的に多く残存している。またこれに関する研究もある程度発表されているが、海運業者や難船の救助にあたった瀬元浦の浦人達が、難船の救助をよそおって、浦人と船人が共謀しておこなった不正行為については、年代が下がるにしたがって多発の傾向にあったことが指摘されているが、その事例についての研究はそれほど多くの例を見ない<sup>2)</sup>。

さて海難救助は、浦方に多くの負担をかけることになるが、無報酬であったわけではない。幕府の定める海難救助法には、海難の程度によって、取り上げた散乱荷物の何割かを報酬として現物支給することが定められていて、浦方では産出しない物資を入手することもできたであろうし、時によっては濡痛み荷物を安価に入手することが出来たであろうから、ある意味では、海難救助は浦

1) 米子市、たたら書房刊（1967年12月）

2) 金指正三著『日本海事慣習史』吉川弘文館（1967年3月）

方の生活向上にもつながっていたといえることができる。

しかし海難救助をよそおって、船方・浦方の共謀で不正行為がなされた場合は、幕府法では厳罰に処することが定められていた。すなわち、この方針は寛永13年8月の法令以来、幕末にいたるまで踏襲された定めである。しかし、近世初期・中期はともかく、幕末にいたるまで、果して厳しい断罪がなされたか否かは疑わしい。すでに大方の研究者が承知の法令であるが、念の為、寛永13年8月の法令をあげておこう。

定<sup>3)</sup>

1. 公儀の舟は不及申、諸船共に難風に逢候時は助舟を可出、磯近キ所は成程精を入、不破損様に可肝煎事
1. 船破損の時、舟主頼候ニおゐてハ、其浦の者荷物精を入、可取上之、然は其上る所の荷物の内、浮荷物は廿歩一、沈荷物は拾歩一、但川舟ハ、浮荷物三拾歩一、沈荷物ハ廿歩一、其取上候ものに可遣事
1. 於沖荷物はね候時は、其舟着候所の湊にて、代官下代并庄屋出合、遂穿鑿、舟に相残荷物の分書付之、証文可出事

附、船頭浦の者と申合、荷物盗取之、はね候の由申ニおゐてハ、後日に聞候共、船頭は勿論、申合候族不残死罪、其浦は過料として、家毎に鳥目拾正宛可出事

右条々可相守此旨、惣て悪敷儀仕におゐてハ、其所の者は不及申、他所より成共、訴人に可出、御褒美可被下之、其上科人の儀ハ、随罪の輕重、可被仰付者也、仍如件

寛永13年8月2日

江戸、大坂間の海上輸送は、慶長末年、江戸城修築を西国諸大名に命じ、資材運送が西国の廻船によっておこなわれたことから始まったと考えられる。さらに江戸の都市発展によって、生活物資の供給を上方、西国にまたなければなら

3) 金指正三著『近世海難救助制度の研究』吉川弘文館、1968、45 | 46ページ。触達など引用文中の之、お、而は、の、より、てになおした（以下同じ）

らなかったことから、早くも元和5（1619）年、泉州堺の人が紀州富田浦の250石積廻船を傭船して、江戸へ大廻り荷物を積送ったという、商人による江戸への物資輸送が始められ、商人荷物のみならず武家方荷物も合載しての輸送が行なわれた。したがって武士、町人の必要物資輸送の安全確実性を保持する為にも、不正行為には断固として厳罰主義でのぞむ幕府法令が必要であったわけである。

まず「定」の第一条では、遭難船は官船・私船をとわず、救助船を出して船舶を破損しないよう救助することを命じている。この「不破損様」との注意事項の解釈に、「救助する如く見せかけて救助義務を果し、他方船舶破損によって、その積荷を掠奪または救助報酬を請求せんとする弊風が存したからである。」<sup>4)</sup>との解釈もある。

第二条は、それまであいまいであった救助の報酬基準を設けたものである。

第三条は、遭難船の浦仕舞に関する規定である。注目すべきはこの追加条項で浦方・船方共謀による遭難擬装、あるいは積荷の窃盗に対する断罪の規定があることである。この規定の適用でよく知られている事例として、新井白石がこの法令によって、遠江国篠原浦においておこった事件紀伊国船津浦の船を破壊し、積荷を掠奪した浦人を、船頭が抜刀して切りつけた刃傷一件を裁いた例が「折たく柴の記」<sup>5)</sup>の宝永5（1708）年9月21日の条にみられる。すなわち、白石は、船頭の刃傷との申立に偽りありとの理由で船頭を死刑に処すべしとの意見をしりぞけ、船頭は無罪、掠奪者の死罪と浦人には罰金刑を主張し処罰している。ところがここに取りあげた事例はいささかその様相を異にしている。いずれかといえば、「不正一件」として整理されているが、不正の疑いは稀薄である。まず、史料によって与えられた与件をあらってみることにする。

4) 金指正三著、前掲書、49ページ。

5) 岩波書店『日本古典文学大系』、95、320、321ページ。拙稿「十組諸問屋と菱垣廻船」経済論集、16-4・5合併号（1966年12月）

## 船主・沖船頭・水主

まず、「摂津国御影治作沖船頭保蔵乗」と記録された船主の御影治作とは誰か。

天保15(1844)年の『御城米御備船・大阪市中樽廻船・同菱垣廻船・道具帖』<sup>6)</sup>によると、151艘の船名が収録されており、その中に、(治作が次作と書かれているが、他の史料によって同一人物とも考えられる)「由 順勢丸 千五百石積 同(御影)嘉納次作船 安蔵(保蔵か)十六人」,「由 順吉丸 千五百石 同 嘉納次作船 安太郎 十六人」,「由 順栄丸 千四百石 同 右同断船 万五郎 十六人」,「由 住徳丸 千五百六拾石 御影 嘉納屋次作船 市右衛門 十六人」,「由 和合丸 千三百四拾石 右同人船 市五郎」の5艘が次作持船として登録されている。他に嘉納屋一統の持船として、商標(卍一本を図案化したもの)を用いた船に嘉納屋次八郎船2艘、嘉納屋弥兵衛船2艘、嘉納屋次郎右衛門船1艘がそれぞれ登録されている。

また、嘉永4(1851)年の『樽廻船名前帳』<sup>7)</sup>には80艘の船舶の船主・船名・船頭名が、収録されており、その中に西宮の樽廻船積問屋常念恒太郎店の仕建にかかる5艘の船のなかに、嘉納治作名で、「住徳丸市右衛門、嘉明丸要太郎、歓光丸保歓、嘉納丸藤太郎」の4艘が登録されており、さきに掲げた天保15年の御備船に登録されていた「住徳丸市右衛門」の船名・沖船頭名が、嘉永4年の「樽廻船名前帳」にも同名で登録されており、沖船頭市右衛門は常雇いで住徳丸専従の沖船頭であったと考えられる。以上のことから御影治作もしくは次作と記録された船主は、御影の酒造家嘉納屋治作と同定できるのではなかろうか。

ちなみに、初代材木屋治兵衛にはじまり、本嘉納・白嘉納にわかれた嘉納一統の本家分家の系統図<sup>8)</sup>をあげると、本嘉納家からわかれた「由店」二代目に

6) 『続海事史料叢書』第2巻, 324—333ページ。

7) 同前掲書, 336ページ。

8) 白鶴酒造株式会社『白鶴二百三十年の歩み』98ページ。

初代  
彦右衛門宗清

2代  
彦右衛門良閑

(彦右衛門相統)

萬助

初代材木屋  
治兵衛良清

9代生魚屋  
治郎太夫宗壽

2代材木屋  
治兵衛長好

享保15相統  
朝爰・良西

初代  
久兵衛

寛保1生  
安永5歿

白嘉納

3代  
治兵衛尚久

安永3相統

本嘉納  
材木屋本家

治郎右衛門秀孟

享保9生  
寛政10歿

はつ  
匠出店

養夫  
治三郎

治郎右衛門良円

治助

治郎八

岩次郎  
(久兵衛相統)

治郎吉

初代  
治作郎

曲店

二丁目  
久兵衛

中年彦四郎

辰巳分家

勝三郎

文化13入家

養夫  
文化6分家

4代  
治兵衛繹貴

寛政5生  
天保3相統

文政3分家  
法名・良生

柳店分家

保兵衛

文政3分家

大西分家

治三兵衛

文政10分家

百一分家

長兵衛

文政10分家

5代  
治兵衛尚正

天明政4生  
天保2歿

明治6元服  
天保12相統

法名・良学

松店分家

三平

天保14分家

東奥田

だい

養夫  
治八郎

2代  
治作

庵店

治吉

太郎吉

9) 柚木 学著『近世灘酒經濟史』237, 238ページ。

## 沖船頭保蔵・水主

嘉永5（1852）年、難船のため下田湊に入津した御影治作船の乗組員は16名である。第1表に示すとおり、沖船頭保蔵は芸州因嶋の出身で、行方知れずになった岩松・林蔵をのぞき、13名の水主の出自が判明する。楫取の直兵衛が最初に雇われ、美保関の定吉と下関の次兵衛が次に、この2人を除いてほかは因嶋・瀬戸田島など。船方三役といわれる船頭・楫取・賄（もっとも岩松は行方しれずになっている。）の出身地・地縁によって雇い入れられ乗組みになったことがしれる。

ところで、古今、船手の巧者として知られた安芸国因嶋の「三庄船・椋浦船」は外洋廻船として活躍していたが、船持衆の集団としての結束が強く、それ

第1表 御影治作船乗組員一覧

役 向	名 前	年 齢	出 身 地	雇 傭 月 日
船 頭	安 蔵	46	芸州因嶋 三 庄 村	5月晦日
楫 取	直 兵 衛	43	同 椋 浦	5月5日
賄	岩 松	(行 方 不 知)		
水 主	竹 次 郎	28	芸州因嶋 三 庄 村	11月8日
"	伊 兵 衛	28	同 三 庄 村	8月15日
"	乙 蔵	26	同 三 庄 村	8月15日
"	定 吉	26	雲 州 三穂ヶ関	5月15日
"	音 作	30	芸州因嶋 椋 浦	7月10日
"	喜 代 蔵	22	同 土 生	11月11日
"	亀 蔵	23	同 三 庄 村	8月15日
"	安 兵 衛	30	芸 州 瀬戸田島	5月26日
"	伊 勢 吉	26	芸州因嶋 鏡 浦	5月26日
"	次 兵 衛	30	長 州 下 関	5月15日
"	由 蔵	24	芸州因嶋 三 庄 村	6月1日
"	林 蔵	(行 方 不 知)		
か し き	松 蔵	14	芸州因嶋 鏡 浦	5月26日

備考「浦賀奉行所史料」の浦方調書によると、保蔵は安蔵と書かれているのでそれによった。

また直兵衛・音作の出身地は因之嶋樟之浦、喜代蔵の出身地は七生と記されているが、校正ミスと思われるので、樟之浦は椋浦、七生は土生に訂正した。

は外部に対するばかりではなく内部に対しても同様であった。』<sup>10)</sup>ことが指摘されている。すなわち、「芸州因島棕之浦三ツ庄村 両浦廻船定書 文政九丙戌年」<sup>11)</sup>によって知ることができる。

一、水主共賃銀去る午年集談の節申値置候通の事、尤水主差間の節内証にて、  
為心附少々ニてモ堅ク無用、万一相背心附遣候者ハ、銀匁割宛の為弁銀廻  
船方頭取元へ取置候事

一、水主共の内格別不埒者にて、船手迷惑筋に相成候者は、抱船持より頭取元  
へ申出有之は、已来堂内廻船水主稼停止申附候事、万一相背召抱候船持之  
節ハ、為弁銀三百目頭取元へ取立候事

一、水主の内賃銀賃越等有之候者、病氣等偽申立外船え罷越候節ハ、相互ニ其  
主人え駈合、賃越□銀無用捨抱主人より弁出候事、譬へ上下乗せ候とも右体  
不埒の儀いたし候者召抱候節は、其船主不行届相当候ニ付、其船主より速ニ  
取引可仕事

一、水主とも先ノ主人より暇乞、外船稼致候て差間無之者へは暇手紙遣し、其  
手紙無之分ハ引請雇入不相成、万一猥ニ相抱候節は為弁銀百匁雇入候船主よ  
り廻船頭取元へ取立候事

一、廻船水主雇入御多領人決て不相成事

一、水主共の内旅他所乗組の船致出奔、猥ニ外稼等いたし候者ハ、其段廻船方  
頭取并に支配御役人中手元へ申出致候様、已来相心得候事

（中略）

右の条々両浦船持集談の上、如是相究置候間、不怠相用可申、仍て定書如件  
文政九丙戌年五月 棕之浦三ツ庄船持中

因島東海岸備後灘に面する棕浦と弓削瀬戸に面する三庄村の廻船持の間で、  
水主不足に対する対策として、お互に(1)、協定賃銀を守って、心附のような増

10) 豊田・児玉編『交通史』体系日本史叢書24所収、第4章第3節。渡辺信夫「流通経済の発達と海運」

11) 金指正三著『日本海事慣習史』77, 78ページ。

銀をしないこと。(2)、不良水主は雇わぬこと。(3)、前貸銀のある水主を雇わぬこと。(4)、前雇主の暇手紙のない水主は雇わぬこと。(5)、他領の水主は雇わぬこと。(6)、他国に出ての稼ぎの多い水主は雇わぬこと。などを申し合わせているのである。

さすれば、安蔵以下因島出身の11人の水主は申し合せの(6)に該当する者たちとなり、船方頭取ならびに支配御役人に申し出の上、外稼ぎにでたものであろうから、摂津御影の廻船に乗組んで、上方・江戸間の酒荷物ならびに諸荷物の輸送に従事したとしても、海運労働市場における規制や不良不正に対する措置も十分に承知していたであろうと考えられるのである。

### 積荷協定

元禄7(1694)年、江戸通町仲間の大坂屋伊兵衛の奔走により、海上輸送の利害を共にする江戸問屋仲間が、廻船問屋・船頭・水主の不正行為を是正するために、連合して江戸十組問屋を結成した<sup>12)</sup>。しかし必ずしも十組諸問屋の利害得失は同じではなく、送り荷物で下積される樽荷と、仕入荷物で多くは上積される荒荷とでは海難時に荷打、濡痛みなどによる海損は荒荷の荷主の海損分担が多額となり、海損処理の際の紛争が絶えなかった。この様な事情と、宝永4(1704)年には西宮が積所として認められ、伝法・兵庫について江戸下り酒を積荷とする西宮酒積問屋が成立した<sup>13)</sup>。こうした事情や条件が整って、享保15(1730)年、十組問屋から酒店組が分離独立することになった。したがって積荷についても諸荷物のうち、砂糖・水油をのぞき樽荷は樽廻船一方積、酒荷物以外の荒荷、砂糖、油樽は菱垣廻船一方積の積荷仕法が定められた。

やがて安永元(1772)年にいたり、大坂・伝法樽廻船問屋8軒、西宮樽廻船問屋6軒および江戸積酒諸荷物廻船問屋株の公許、翌安永2年菱垣廻船問屋9軒も問屋株を公許されるにいたり、両廻船はさきの荒荷菱垣一方積・樽荷樽一

12) 拙稿「十組諸問屋と菱垣廻船」経済論集第16巻第4・5合併号。

13) 拙稿「近世中期の樽廻船輸送の動向」経済論集第9巻第5号。



方積の積荷仕法を修正して、米・糠・酢・醤油・藍玉・阿波蠟燭・灘目素麵の七品は両積とする積荷協定を結んだ。

しかしこの協定も厳密には守られず、菱垣廻船へ荷物積の諸問屋から樽廻船へ洩積みする荷主も数まし、加えて菱垣廻船の海難事故も頻発して菱垣廻船は衰運に向かった<sup>14)</sup>。これを挽回すべく十組問屋頭取の努力もあったが、その一例が紀州藩・紀州廻船への働きかけである<sup>15)</sup>。天保4（1833）年、菱垣廻船と紀州廻船の合体は成功した。そして先の七品両積の協定に、新たに鯉節・塩干肴・乾物・幕府御用砂糖10万斤の両積が追加された。

もっとも砂糖は御用砂糖10万斤の範囲で両積とされたが、水油については、文政5（1822）年8月、大阪廻着水油の減少の対策として、兵庫菜種問屋および寛政3（1791）年以来許可されていた、西宮・灘目油江戸直積廻問屋を差止め<sup>16)</sup>、人力絞、水車絞とも自家用以外の油は必ず大阪油問屋への廻送を一度ならず再度にわたって命令している<sup>17)</sup>。

ところが天保3（1832）年11月には、再び政策を改変し、西宮・灘目油江戸直積廻問屋差止めを解除するのである。さらには播磨国の水車人力油絞株を新規に免許し、江戸直積廻しおも許した。すなわち、

一、堺並摂津・河内・和泉水車人力絞油屋共油売捌方の義、向後大坂油寄せ所江差出、問屋共江可売渡候、（中略）且摂津国の内灘目住吉村水車新田両村請負、并兵庫より西の宮の間にて絞り候油の分ハ、大阪えは不売出、江戸一方直積廻し申付候條、樽船を以可積送候、尤江戸壺岸嶋え油寄せ所取立候條、同所ニおいて油問屋并問屋並仕入方の者え可売渡候、且播磨国は此度新規ニ油絞株差免、右一国の絞油江戸一方直積廻し申付候條、大坂えは不売出、惣て灘目油直積廻しニ准し、樽船を以壺岸嶋寄せ所え向差送、油問屋并問屋並仕入方の者え可売渡候、尤播磨国絞油の義は、最寄廻船の内、樽船の見合よりも運賃下直

14) 柚木学著『近世灘酒経済史』204—208ページ。

15) 上村雅洋著『近世日本海運史の研究』島川弘文館1994年4月、113—120ページ。

16) 大阪市史第4、792ページ。

17) 同上 793、799ページ。

にて、江戸早着の船も有之候ハ、追ての様子ニ寄、是等の船えも積入、差送候様可取計候」<sup>18)</sup>と、西宮・灘目・播磨国に限定されたといえ、「樽船をもって積送るべし」と水油が樽廻船荷物であることを公許したのである。

このような享保15年から天保4年までの間の積荷協定もやがて天保改革の実施にいたって一変する。すなわち、十組問屋・廻船積問屋に達せられた触書によると、

十二月廿三日 江戸菱垣廻船積問屋、其外都て問屋・仲間・組合杯と唱候儀差止、何国より出候何品ニても、素人直売買勝手次第たるへき事（触）<sup>19)</sup>

江戸菱垣廻船積問屋共より、是迄年々冥加上納金いたし来候処、問屋共不正の趣も相聞候付、以来上納ニ不及候、尤向後右仲間株札は勿論、此外共都て問屋・仲間并組合杯と唱候儀は不相成候、右ニ付ては是迄右船ニ積来候諸品は勿論、都て何国より出候何品ニても、素人直売買勝手次第たるへく候、且又諸家国产類、其外惣て江戸表え相廻し候品々も、問屋ニ不限、銘々出入のもの共引請売捌候儀も、是又勝手次第の旨、於江戸表被仰渡候、右は諸商売手広ニ相成候様、格別の御趣意を以被仰渡候儀ニ付、厚く相心得、江戸積いたし来候ものは無危踏、諸品積廻方可相励候

右之通三郷町中可触知者也

丑十二月

石見

遠江

十二月廿六日 菱垣樽船積荷物之儀、是迄の規定に不抱、荷主船主相対次第運送可致事（触）<sup>20)</sup>

菱垣樽船積荷物の儀、規定有之処、此度江戸菱垣廻船積問屋組合等被差止、

18) 御触書天保集成(下), 671—672ページ。

大阪市史第4, 1019—1020ページ。

19) 大阪市史第4, 1504ページ。

20) 大阪市史第4, 1505ページ。

諸品素人直売買勝手次第の旨、彼地におゐて被仰渡候ニ付ては、菱垣樽船積荷物の儀も、是迄の規定ニ不拘、荷主船主相対次第、弁理の方へ積込、無差支様運送可致候、尤菱垣の方ハ、文政の度紀伊殿より貸渡有之候天目船印、差障候義有之候間、以来相用申間敷、右船印早々紀伊殿え返上可致候、右ニ付兩廻船問屋共義、以来諸荷物撰積等決して不致、荷嵩輕目の品も、外荷物同様平等ニ積受、運送の儀精々可相励旨、右兩廻船問屋并右ニ引合候もの共え申渡候間、諸荷物江戸積いたし来候もの共、此段相心得、弥積廻方可相励候

右の通三郷町中可触知者也

丑十二月

石見

遠江

すなわち、天保改革の商業・物価政策として実施された問屋・仲間・組合の停止にかかわって、菱垣廻船・樽廻船の積荷物も「是迄の規定にかかわらず、荷主・船主あいたい次第、便利な方へ積込んで差支なし」と、文政年の菱垣廻船の挽回策の一つとして、紀州藩からの「天目船印」の拝借、やがて天保4年にいたって、従来樽廻船専用として稼働した紀州廻船と菱垣廻船との合体にいたる一連の挽回策も「天目船印」については「差障り候儀これあり候間、以来あい用い申すまじく、右船印早々紀伊殿え返上致すべく候」と命じられ、菱垣廻船は以前の状態にかえり、廻船問屋は積荷の自由が認められた。ところが、嘉永4（1851）年3月、問屋組合再興の触<sup>21)</sup>によれば、

「去ル丑年中諸問屋組合停止被仰出候処、其已来問屋組合商法取締相崩、諸品下直ニも不相成、却て不融通の趣も相聞候ニ付、此度問屋組合の儀、都て文化已前の通再興被申付候、左候連元十組の者共冥加金上納等の御沙汰ハ弥以無之候間、文化以来の商法ニ不流、諸商人共物価引下ヶ方の義厚心掛、実意ニ渡世相営候様得と申諭、取締方等精々可申渡候

21) 大阪市史第4、1943ページ。

三 月

右の通町奉行え申渡候間、向々え可被相触候、

右の趣江戸表ニ同所町奉行え被仰渡候段、此旨三郷町中可触知者也

亥三月

加 賀

日 向

」

と、文化以前の通りに問屋・組合を再興するも、商法は文化以前の商法にながれず、物価引き下げに意を用うように、しかも十組問屋は以前の様に冥加金の上納はなく、したがってかつて与えられていた特権は認められなくなったのである。したがって、株仲間再興後の樽廻船問屋は荒菱垣に加入して荒荷仕建も自由になり<sup>22)</sup>、「荒荷建」とか「仮菱垣」として稼働するようになった。

### 事件の経過

さて、本件の不正荷物取扱い事件のことの次第は<sup>23)</sup>、嘉永5年11月8日、江戸送りの酒、水油、綿、藍玉、茶、經節その他拾い荷物および途中の浦賀に陸揚げする酒、藍玉、船頭買入の米荷物、その他に船中遣いの米、酒などの諸荷物を積んで大阪を出発した。

積荷はすでに「積荷協定」の項でみたとおり、株仲間再興で商法は文化期の状態に戻ったとはいえ、積荷については「仮菱垣」というよりも、主だった荷物は樽廻船積になっている酒、水油、藍玉荷物であるから「樽菱垣仕建」というべきであろう。

船は西風に出帆したが、翌日には辰巳(東南)風に吹戻され神崎に碇泊し、11日になって漸く出帆し、12日には紀州田辺沖に達し、九鬼沖、尾鷲沖、浜島沖を無事通過して14日晝に大王崎沖に達した。

ところが同日明け六ツ時(午前6時頃)から天候は西風高浪となり、五ツ時には大風になり帆柱は鳴痛み、船はさらに沖合に吹きはなされ、四ツ時には西

22) 柚木前掲書、241ページ。

23) 前掲「白井家文書」上巻、275—286ページ。

風にあふられ船は面梶（右舷）にかたむき、上積み荷物は二重の垣立をやぶって海中に流失し、船は水入りになって、詮の量が2尺に達したので碇を入れて船を留めたが絶えきれず、九ツ時（午後1時頃）碇を切りはなしたところ、折からの西南風に船は遠州御前崎沖まで走り下った。15日晝にいたり漸く下田湊に入津し、月番船宿へ届出て、浦役人の検分をうけた。その結果、吟味検分のおわった諸荷物は、屋形下8カ所、胴の間12カ所、両挾2カ所、合羽下3カ所の都合25カ所に封印し小口荷物は明細に縄張をして浦仕舞の諸手続をすすめた。11月26日、廻船逢難の通達をうけた江戸の荷主らが到着し、翌27日に浦役、町人荷主惣代を召連れ船中に立合せ検分した結果、「別条これ無きに付、明細あいあらため、荷物は荷主船頭へ引渡す」ことになった。

事件はこの後に出現する。賄水主岩松と林蔵が主謀し、他の水主をかたうって、残荷物の中から不正に陸上げて売捌き、小遣錢にでもしようとした事件がこの後にひきおこされる。事件が露頭して後、岩松・林蔵の2人を除いて、船頭、楫取、水主一同は吟味の尋問をうけた。

船頭安蔵は取調べに対し、「難船の節から腹痛で難儀し、15日夜、下田湊へ入津の時から、船中の屋形下で寝込んでいたので、水主共の不正の所業は一向に存ぜず」と返答した。同じく楫取直兵衛も、「難船の砌より持病の癪にて難儀し、入津の時から船中の屋形下に伏せていました。18日夜八ツ時（午前2時頃）、水主の岩松が寝間へ来て申すに、残り荷物の内少々売払い、水主共へ苦錢に遣したいと申しましたので、同意せず、差し止めましたが、病中で寝込んでいたので、事の始末は一向に存ぜず」と返答している。

両人の返答の真偽のほどを正すため、水主一同に尋問したところ、船頭にも楫取にも、「深く取り隠しにする積りだったから、船頭安蔵も直兵衛も存じません」との返答で、本人達の申し口と符合した。

ところで、岩松が直兵衛に同意をもとめて、差し止められた密談一不正荷物売捌きについて水主共の申し口は、「賄の岩松の密談に、水主一同ははからずも悪心を発し、残荷物の内少々売払いえば酒代にもなると思い同意した。そこ

で15日の明け七ツ半時（午前6時頃）、胴の間に積んであった荷物を手当り次第に岩松の差図で舢に積込み、同湊に停泊中の兼て岩松の知りあいの廻船まで運び預けた。同日暮六ツ時（午後7時頃）、林蔵が入湯からの帰りに見なれぬ伝馬船で帰船し、傘1箇、綿1本の売先があるとの話に同意し、同人にその掛合いをまかし、林蔵は伝馬船で先の廻船まで引き返したようであった。

翌16日朝、荷物を預けた廻船から、登り日和になったので出帆するから、預り荷物を引取るようにと舢に積んで送り返してきた。

翌17日夕方、岩松、林蔵は入湯のため上陸していたが、六ツ時に岩松、六ツ半時に林蔵がたちかえり、酒6樽、味淋25樽、青蕈2丸を、懇意の者に捌方を頼んでおいたと林蔵が水主共に伝えた。同夜九ツ時、水主一同は酒、味淋、青蕈を舢に積込み運び、下田大工町河岸に荷揚げした。林蔵は陸にとどまり水主は帰船した。翌18日朝五ツ時に林蔵は帰船、その時の様子では、荷物を預け金子を借請けたようだが水主には割り渡さなかった。続いて同日、岩松から藍玉18本、酒12樽、味淋1樽、紙10箇、そろばん1箇、膳1箇を懇意の者に捌方を依頼したとの話で、同夜八ツ時頃、水主一同で荷物を舢に積み運び下田中原町河岸に荷揚げした。岩松は荷物に付き添い、そのまゝ上陸し、伊兵衛、伊勢吉、定吉、竹次郎、林蔵の5名は帰船した。」と不正荷物の荷揚げの一部始終を申しのべた。返答の中の林蔵懇意の者とは下田大工町の儀兵衛、岩松の方は下田三丁目の綱次郎であって、この者たちも吟味をうけている。

その後、岩松、林蔵は、「難船の節、石廊山権現に願をかけたので、船頭の代参」と称して再度上陸し、後日の探索によって判明した彼らの足どりは、参詣をおえて長津呂村の船宿に一泊し、12月1日に同所を出発しての後、消息はとだえて行方知れずになっている。

荷物売捌を委託された両人は、浦役人の取調べに対し、12月5日、両名の預り荷物として請書を差出している。それによると、儀兵衛預り分は、酒31樽、紙5箇、青蕈2丸、3口荷数38。綱次郎預り分は、酒13樽、藍玉17本、綿1本、膳1箇、そろばん1箇、傘1箇、6口荷数34。取調べに対して水主が答え

た荷数と一致する品数で、それぞれ土蔵に入れおき、浦役人の吟味見分を受け封印をして下田町船宿年寄、同町名主、年寄へ御預けの処分を受けた。現品は悉皆そのまゝにおかれていたわけである。

一方、難船の注進をうけた江戸の下り酒荷主惣代3名、荒荷物荷主惣代1名、藍玉荷主惣代1名、浦仕舞のために下田湊に来着した。積荷物についての浦証文、手板、送り状の類の書類がないので荷数の詳細は不明であるが、荒荷・藍玉荷主の惣代は1人ずつであるのに酒荷の方は3人の惣代を派遣しているところから推察すると、主荷物はやはり酒荷であったろうと考えられる。

惣代達は、浦役人の船中残荷物の見分に立ち合い、荷物の引渡しをうけ、不正に陸上げされた荷物の所在と荷数が判明して、残り荷物は揃った以上、歳暮、正月をひかえて一時でも早く江戸に荷物を廻送したい訳である。

しかし事件は主謀者である岩松、林蔵が行方知れずで探索は続行されているという状況下に、「時分柄の儀にて江戸表諸品潤沢に相拘り候間、何卒格別の御慈悲を以て、右御咎の水主共御有免被成下置、元船乗廻し相成候様」と歎願した。この時期の物資輸送の果す役割りは、天保改革以来、江戸表の諸品潤沢と物価引下げをはかることであって、江戸下り荷荷主のこの種の願いに対しては、「荷主のもの難儀に相ならざる様」との処置がなされたようである。

しかしこの一件の水主共処分の顛末を知る史料はない。勿論、不正水主の取締りは、前掲の因嶋三庄船・棕浦船の廻船定書でも知られる通り、不正者は仲間からはずされる。樽廻船においても、「札付き」にして西宮・伝法・大阪の三カ浦では生涯涯雇傭しないとしているのであるが<sup>24)</sup>、勝手積みの許された時には、果して従来通りの取締り処分がなしえたかどうかは疑わしい。

嘉納屋治作船、上念安太郎店仕建には廻船不取締りの前例がある<sup>25)</sup>。すなわち、

24) 西宮市史第2巻、676ページ。

25) 『統海事史料叢書』第2巻、43ページ。

## 廻船不取締りにつき口上書

上念安太郎船

右船先達て故障の儀有之、銘々共迄も申訳無之次第ニ付、急度為相慎候故難  
 渋罷在候、依之已後の儀ハ船主并私共申談、嚴重ニ取締仕不束の儀無御座候  
 間、何卒諸郷御荷主衆中様御仁恵御勘弁を以御許容被成下、是迄の通無御心置  
 御積方被成下候様重疊奉願上候 已上

右船主 嘉納屋 治作  
 代 清助㊤

右の通り相違無御座候ニ付、加印仕俱御願奉申上候 以上

上念屋常太郎㊤

巳三月（弘化2年）

三郷酒家 御惣代衆中

西宮酒家 御惣代衆中

ここに言う、故障の義の内容は判明しないが、何れにしても取締り規制が弛  
 緩していたのであろう。嘉納屋の水主達の取締りも厳しいものではなく、積荷  
 の中に、船頭買入の米荷物とか船頭が下田湊で検分の折に積みおろした酒荷物  
 14樽のなかに、「酒10樽右船船中遣イの分、船頭引渡呉候様願出」ているところ  
 をみると、船中遣いと称して船頭の自由になる酒荷、おそらく「帆待」に類  
 するような船頭に許された若干の役得かせぎをなしえたのではないかと考えら  
 れる。

水主にはそのような稼ぎがおそらく許されていなかったのであろうが、同郷  
 のよしみで船頭にも水主への配慮もあったと思われる。それは岩松の残荷物を  
 売捌くに当って、「捨残り荷物の内少々売払酒代ニても可仕と同意いたし」と  
 述べられていることから推察しうる。

以上、樽廻船の水主共による不正荷物取扱の様子をみたが、酒造勝手造り、  
 勝手積が許された時には、従来の酒需要に別の需要をつくり出すために、船中  
 遣いと称する船頭の自由な宰領にまかす酒を余分に積み込み、北前船稼働にお



ける「帆待ち」、「切出し」に類するような、売捌きの一部を船頭・水主に与えることを船主・荷主（酒造家の持船であれば手船に手船を積むことになる）が許容していたのではなかろうか。

ともかく、沖船頭安蔵の下で乗組員が編成され、積荷運送を実施したのは、恐らく6月初旬からで、11月の航海が最初ではなかろう。それは第1表に示したとおり、船頭・水主の雇傭の月日で判明するように、楫取直兵衛が最初に雇われ続いて5月15日に因島以外の雲州美保関の定吉と長州下関の次兵衛、5月26日に芸州瀬戸田の安兵衛と因島鏡浦の伊勢吉と同人に伴なわれて上阪した14歳のかしき松蔵が雇われ、その後の5月晦日に船頭として因島三庄村の安蔵、6月1日に同じく三庄村の由蔵の8人と外に7、8人の水主が雇われて、船頭安蔵指揮の下に運送業務が開始され、6月から10月までの5か月間に数回の航海がなされたであろうと考えられる。

その間に、水主の若干に移動があり、下船した水主の欠員を、おそらく船頭・楫取の縁故をもって、7月に因島棕浦の音作、8月に三庄村の伊兵衛、乙蔵、亀蔵が雇われ、11月の航海に当って更に三庄村の竹次郎、因島土生浦の喜代蔵を雇って補充している。なお、行方知れずになっている岩松と林蔵は当初からの乗組みであったか否かは判明しないが、事をおこす程のリーダー格であったことから古参と考えられるし、もし途中で補充されたとすれば、中途採用者は因島出身者で補充しているので船頭・楫取の縁故者であろう。さすれば同じ船で生活・行動を共にしているわけであるから、気心も知れているだろうし、積荷の一部の売捌きについても、その荷物が船頭外乗組員の宰領にまかされた荷物であったかも知れないし、楫取直兵衛は岩松から直接相談を受けており、同じ屋形下で伏せていた船頭安蔵が全く知らなかったとは考えられない。むしろ、不正行為者に後に課される処罰・制裁を充分に承知している船頭・楫取が、船頭の代参として石廊山権現参詣に遣わしたということは、行方知れずとなろうとも、幕府法令で厳しく処罰されるよりもとの配慮の上での措置ではなかったろうかと考えられる一件である。